荒猪との対決 1-2

田宮 治

その射撃術

大猪に対する思いは格別なものであるが、愛犬たちに危険を承知の上で「荒猪と対決」させるのには、それなりの意味がある。

その一つは、猪犬が乗り越えなければならない大きな壁（ハードル）になっていて、この対戦を勝ち抜くことで、技を覚え、磨き、そして生き抜く術を身につけてもらわねばならないからである。

確かに大猪との戦いは、何度やっても恐ろしいもので、気を抜けるような生やさしい相手ではない。しかし、そんな恐ろしい相手だからこそ、猪犬だけでなく、猟人だって真剣勝負になるのであり、「猪猟の極意」は、すべてこのような緊迫感あふれる実戦の中から生まれるのである。

簡単に荒猪との対決などといってみたところで、並の猪犬ができることではない。猪の中で、特に「荒猪」と呼び区別するのは、いうまでもなく猪犬切りの名物猪で、犬との戦いに勝ち抜き、罠や弾幕を潜り抜けてきた歴戦の兵（つわもの）なのである。

当然のこと、そんな「化け物」に戦いを挑むのは、まずもって愛犬にその恐ろしさを教えることであり、荒猪との戦いは万策をめぐらし、必ず勝つことによって愛犬たちを守り、名犬への道にきちっと乗せてやることである。

単独で猪猟をやるからには、山では何が起きるか計り知れない。猟野で突然出くわす荒猪でも慌てることなく、平然と戦いたいものである。そんな戦い方をするために必要なことは、常日頃から猪犬の芸を磨き、撃ち込みはあくまで実戦を通し、「この撃ち方でないとだめだ」というこだわりの「射撃術」を身につけることである。

単独猪猟を志したからには、必ず覚え、どんな戦いでも乗り越え、犬たちを守り通していかなければならない難題、つまり「登竜門」がこの「荒猪との対決」である。なんのことはない。落ち着いて平然と日々の鍛錬を生かし、見事撃ち獲ってもらいたものである。

荒猪!? それがどうした（撃ち方の違い）

ごく一般的にいうならば、猪猟での射撃術などは小物でも荒猪であっても、特別変わったものではない。グループ猟などで何十年もタツを張った名手ならば、「荒猪の撃ち方!? それがどうした」という程度のことである。

しかしながら、単独猟やタツを張らずに二、三人で行う猪猟で、咬み止め犬を使っての射撃術となると、荒猪の撃ち方は特別なもので、小物に対するものとは一変する大事なのである。

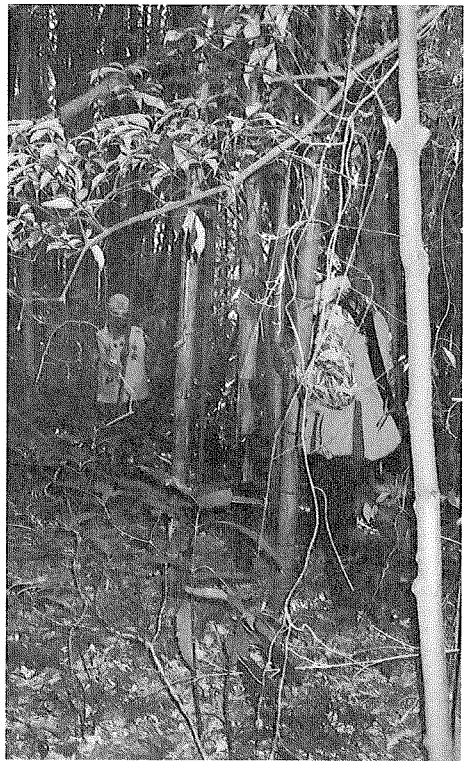
あくまでも私がやってきて、「これが一番安全で確実である」と思っている俺流の荒猪撃ちではあるのだが、間違ったら取り返しのつかない大変なことになるので、初心者でも真っ先に教え、必ず会得してもらわなければならない大切なことなのである。

何もかも一人で遣り抜く単独猪猟では、何十年タツを張ろうと決して理解できない止め犬猟ならで

はの難しさと楽しさがある。そして苦難を楽しさに変えるためにも、犬たちの止める接近戦の絡み合う猪に対する撃ち方と、「荒猪に対する勝ち方」だけはきちっと覚え、対処できるようにしておきたいものである。幸いなことに、一番目の接近戦は完璧なものを北嶋氏に見てもらい納得していただいた。

残るは難敵の「荒猪獲り」であるのだが、これは山彦会千葉県支部の初猟の会合で打ち上げた大きな目標でもある。地元猪猟グループの甲斐犬三頭を切り裂き、紀州犬一頭を殺した荒猪は何が何でも山彦会で撃ち獲り、猪猟の自信としたい。そんな思いで「その大猪は俺たちがいただきだぞ!!」と宣言した以上、必ずや北嶋支部長の見ている前で実践し、激戦を制する見事な戦いぶりと、絶対に勝つ安全有利な射撃術を見ていただき覚えてほしい。そして猟場で出くわすどんな戦いでも、必ず勝つことへの執念を汲み取ってもらいたいものである。

小物であったが、この後、北嶋氏が初めて刺し止める。次の自信に大切な一戦



猪の寝屋は真竹藪の中である

大一番（荒猪との一戦）に備えて

願ってもない「接近戦」を物の見事に撃ち獲ることで、勝つ喜びと、食い下がる犬たちをかわしての接近戦での撃ち込みや、その対処方法を覚えてもらった。

その興奮さめやらぬうちに、何とか大猪との対決を求め猟場を隈なく探し回るが、出るのは小物ばかりである。猪猟の常識では、小物（六〇～八〇キロ）ならば獲りやすいはずである。

しかし、それは使う犬と狩る山の状況によるのであるが、その辺のことをどのように説明したところで分かってくれるわけもない。不安を掻き立てるよりは、実戦で猪に当てて撃って覚えてもらうほかにないと思ったのである。

「さあ、撃ってくださいよ」と、山を知っている北嶋氏と頑張って追い出すが、なかなか思うように

タツにもはまらないのである。犬たちは毎回猪を起こし、止め鳴きもあるのだが、千葉の山は比較的なだらかな上に竹藪や茂みが多く、小物はその中を逃げの一手である。小物といっても、重圧に物をいわせバリバリと茂みを突破して行くが、犬たちはそんなわけにはいかない。

その結果が、止めきれないで追うことになる。それでも「猪の出ないことはない」と北嶋氏に感心されるほど犬たちはよくやっているのだが、どうしてもあと一歩のところで逃げられて悔しい思いをしていた。

止めた猪に寄りつき二発撃って逃げられたり、せっかくはまったタツでも、二発撃っても当たらなかったりで、なかなか思うようにはいかない日が続いていた。

このままでは「追い犬」になってしまう。私はたまらない思いで山梨に週一回必ず出猟していた。知り尽くしている山を気楽に狩るのだが、同じ犬群なのにきちっと止め置き、必ず獲らせてくれる。これは止め犬としてのこだわりの調整であり、頂点を目指す俺流の挑戦なのであるが、山彦会千葉県支部会員には一切言わず、自らの力で猪猟を究めてほしいと思っていた。

支部会員は八名で、三十歳から四十歳までの若者が四人もいる。このメンバーでどんなに頑張っても猪猟での四年では、この程度がよいほうかもしれない。必ずや失敗の中から若者らしい何かを摑み取ることを信じ、猟の指揮は、すべて支部長の北嶋氏に任せて自由に猪猟を楽しませ、私は勢子役に徹していた。

「北嶋さん、撃ち外しても絶対に怒るなよ。失敗してもよいところを見つけ、上手に褒めるように……」と、いつも注意していた。北嶋氏も、以前静岡のグループに入っていて逃がした時の怒られ方がひどく、心を痛めていたようで、「そうだよね」と、うれしそうである。

その後も犬たちは相変わらず猪を必ず起こし止めるが、寄りつきがうまくいかなかったり、タツにはまっているのに猪に気づかれ戻られたりで、なかなか成果が上がらなかった。

そんな中で私は、失敗の原因を突き止めていた。

「この山で四年間も猪猟をやっていた」ということで、山だけは知り尽くしていると思い込んでいたのが第一の間違いだったのである。猟場は確かに知っているようだが、大切な猪の寝屋や、追われて逃げる猪道、さらにその猟場に接続する新しい猪の安住地、つまり「逃げ込む場所」、これらがまだまだでは、とても知り尽くしたとはいえない。私は猟場を隈なく探し回り、自分の納得できるようにするため、先頭に立って狩ることにしたのである。

その結果、まだ十二月だというのに、千葉では猪が孟宗竹を食べて真竹の藪で寝ていることや、必ず使う猪の逃げ道を発見し、その逃げ道の先には必ず猪が安心できる新天地があるとの確信に基づき猟場を改めて検証した。

万全の態勢で猪を迎え撃つためのタツの心得や、止め撃ちまでも一つひとつ、事細かく説明し、何とか撃ち獲らせ自信にしたいと思っていた。

荒猪との一戦

犬殺しの荒猪は、その後パッタリと跡を消し、姿を見ることもなくなっていた。思いどおりの猪猟ができず思案に明け暮れていた、ちょうどそんな十二月十九日（土曜日）、思いもよらぬ方向から荒猪様のお渡りである。

この日は北嶋氏と加藤君三人で、翌日、全員でやる山の下見を兼ねた出猟であるが、できれば私の得意な単独猟を前面に押し出し、見事な猪の止め撃ちをこの二人に見てほしい。止め犬群を使ってタツにはめ込むよりは、はるかにやさしく、気楽なこの日に私はかけていた。北嶋氏と二人で獲った「猪の初獲り」のように、「こうなったら一人で猪を獲ってやる」。そんな悲壮な覚悟を胸に秘め、いつものように車道を流し、猪の入り跡の確認である。

この荒猪は何と反対の山から車道を堂々と渡り、願ってもないホ

ームグラウンドの猟場に入っているではないか。

「今朝だよね」

泥足のまだ乾ききらない跡がアスファルトにくっきり残っていて、その大きさからして、間違いなく探し求めていた大猪だ。三人で思わず微笑み、迷わずこの大猪に的を絞ることにしたのである。

訓練はこの咬み止めにつながる。120kgを見事ねじ伏せたヨシ号、マロ号、シロ号の戦い終わってのよい顔です

翌日、みんなで狩りたいとも思うのだが、この猪は並の犬たちでは動かず、必ず戦いを挑んでくるに決まっている。タツでも思うように撃てない今ある実力では危険すぎて、とても止め撃ちに向かわすことなどできない。そのことを二人に話し、これからはじまる荒猪との対決方法をできるだけ分かりやすく教える。

このような「化け物」との対決は、話して分かるような生やさしいことではないが、激戦の前にその流れだけは知っておいてもらい、本筋は実戦を見て覚えてもらう以外にないのである。

「よし、今日やるぞ!!」

「明日では遅い」

刺し止めて引き上げてみると、何と80kgの牡でビックリ!

やっと現れた大猪のこと、またどこかに隠れてしまうに決まっている。幸いに、猪が登った山は、大峰筋が「初獲りの猪」が寝ていた真竹藪へと繋がる一本の高い峰が通っており、今日も同じ所に車を止め勝負できるはずである。あそこから攻めれば、俺一人で十分に戦えるし、現場の山は一カ月の間に何度も狩り込み、知り尽くしている。はやる心を抑え、入念に抜け跡を確認するが、登った裏の小沢二本にも抜け跡はない。グルッと大道を回って、渡りを見切って抜けていないことを確認して林道に入り、一番奥の大杉林にある車止めに車二台を止める。

本来ならば、朝渡って登った下にある畑にタツを置くべきだが、私にとってそんなことはどうでもよいことで、気持ちは本来の「単独猟人」になりきっていた。二人には必ずこの願ってもないチャンスを物にして、荒猪の恐ろしさと、すさまじい迫力に対処する現場の様子を生で見せたい。そのために、藪をもぐりやすく、走りやすい軽装にした。

犬たちも、切られない大猪獲りの名犬に登りつめた一秋（一ノ矢）のヨシ号とマロ号、そして三ノ矢のシロ号（一才二カ月）の「止め芸」に賭けたのである。

荒猪ともなると、咬みがどんなに強い犬でも二頭や三頭で咬み止め、捩じ伏せることはできない。二頭くらいの犬が咬みついたままでも、大猪は飛ぶ気になれば根こそぎ持って突っ走るものである。この時に木にぶっつけられたり、牙をもぎ取られたり、取り返しのつかないことになるものである。そんなことまで考えて、犬は咬み、鳴き自在の実績を誇る三頭にしたのである。

「さあ、これでよし。必ずこの山に潜んでいる。俺についてよく見るのだぞ……」

いつもの道順で登りはじめた。大杉林の中は朝霧が残り薄暗かったが、少し空けた大峰に出ると明るくなり、日本晴れのまたとない猟日和である。

北嶋氏と加藤君を先に立たせ、峰伝いに絡んだ猪を突け撃ちして見てもらった上にさしかかった。犬たちはその下に茂る真竹藪に狩り込んで行った。しばらくすると、シロ号とヨシ号が戻って来た。「柳の下にドジョウかと思ったら、寝ていなかったね」と言うが、若い二人はピンとこないようだ。

「この先だね」と、一〇〇メートルも進まないところでマロ号の帰って来るのを待つ。

「おかしいなあ、臭いがあるようだったね」

五分くらい立ったままでささやいていると、マロ号の鳴きである。それは通り過ぎた真竹の茂みの中で、ヨシ号たちが下りて探していた真竹の茂みの反対側である。区切り良いマロ号の見事な「ワン、ワン、ワン」の寄せ鳴きである。

「よし、出たぞ!!」

二人を峰に残し、「大猪だから必ず上からだぞ!!」と言いながら、元来た峰をぶっ飛び、マロ号の鳴き声の上に立った。

「もう大丈夫だ。猪の戻る道を断った。これで猪はあなた方の下の凹地を走るだろうが、あくまで上で待ち、決して近よらないように……」

こう無線で伝えるが、気がはやり、後のほうは聞こえなかったかもしれない。すでにヨシ号もシロ号も寄りつき、声を合わせるように力強い止め鳴きであるが、さすがに咬みついたものではない。生で聞こえる「グォーウ、グッグッ!!」と威嚇する荒猪ならではの凄まじい唸り声が薄暗い真竹藪の中から響き渡り、いやでも戦闘ムードが高まる。

私は犬たちの必死の鳴き声で、戦いの現場は大峰下五〇メートルくらいで、「しばらくは猪を動けなくする、少し離れての吠え込みだ」と判断した。そこで、いつものように大峰筋を時計の「一時」の方向から大猪の入った「十二時」に立ち、わざと声を出して二人に指示。さらに「十時」のあたりまで回ることで、人の臭いと足音で猪が峰を越えないように周到な方法で準備した。

そして、ちょうど十一時の真上から竹藪にソロリソロリと静かに分け入った。念のため言いおくが、荒猪との対決は気持ちだけは大胆だが、その行動はあくまで平然、静かな寄りである。猪に気づかれないように慎重に寄れば、戦いなれた大猪が気づいたとしても、逃げ道を断つ止め上手の犬たちを突いて飛び出すものではない。

いつでも撃てるように銃を前に出し、薄暗い竹藪をソロリソロリと静かに進む。犬たちはすでに私の接近に気づいているようで、今にも咬み込む勢いである。

「もう少しだ。咬み込むなよ」

祈るような気持ちで、四つん這いになり倒れた枯れ竹をくぐり続け、やっとのことで五メートルまで近づくが、そこに立ちはだかる五、六本の横倒しになっている枯れ竹で、もう進めない。

仕方なく枯れ竹の透き間からそっと見ると、目の前に大きな猪の尻が見える。その先二メートルくらいでマロ号がすごい顔で吠えている。ヨシ号もシロ号も素晴らしい吠え込みであるが、姿は見えない。

さて、どうしたものか。立って飛び越えるわけにもいかないので、はやる気持を抑え、両膝をつ

きじっと撃つタイミングを計ることにした。犬たちは「早く撃て」と言わんばかりの攻めであり、荒猪も背毛をピンと立て地響きを立てての唸りで、何も聞こえないほどの激戦である。

「落ち着け、落ち着け。チャンスは必ずある」

心で念じながら銃を構えてじっと待つ。よく見ていると、お尻しか見えない猪の身体が、犬たちの攻めに対応して、一瞬ではあるが少し首を振って突いて出る時がある。

その一瞬——首を低くして猪の顔が横に向いた時、必殺の一発を送り込んだ。

「ズシーン!!」

ガクッと沈むと思いきや、目にも止まらぬ速さで大猪は目の前のマロ号を踏み倒し、その上を飛び越えて行く。

「くそ!! この……!!」と、二発目を夢中で撃つ。「ダッ、ダーン」というような全くの連続撃ちであるが、二発目は指が自然に動いた状態で、狙いも、マロ号を押しつぶすように飛び越える大きな猪の肩である。これが犬から一番安全なところと、とっさに判断し、自信を持って撃ったつもりが、何と荒猪は突っ走るではないか。

「下に飛んだぞ!! 行くぞ!!」

大声を張り上げ、枯れ竹を飛び越え、すぐ前の激戦の場に立った。しかし、北嶋氏も加藤君も銃を撃つどころか静かなもので、犬たちまですぐそばで元気な咬みつき声を上げている。犬たちの前をよく見ると、枯れ竹と草の茂みに大猪がこけている。

「当たっていたか!? よしよし」

犬たちに近寄り、最大限のエールを送るが、さらに近寄りなでてやれる状況ではない。さすが大猪はまだ首を振り、最後の抵抗を続けている。猪止め犬は、ここから動かなくなるまでの攻め方を何度も重ねさせることである。うれしくなり大声を上げ、「止めたぞ!!」と怒鳴っていた。

すると、静かだった右上二〇メートルくらいの所から北嶋氏の元気な返事がはね返ってきた。ここまで寄ってくれていたのか。

「上出来、上出来」

反対側二〇メートルくらいには加藤君も駆けつけ、撃つ時を待っていたとのことである。犬たちに話しかけながら待っていると、バリバリ音を立てながら「すごい所だね」と二人がやっと駆けつけてくれた。犬たちの咬み込む様子を恐ろしそうに見ながら「これはすごい大物だ」とさかんに喜んでいる。

そんな中で、こんな時でないと説明しても分かりづらい荒猪との対決方法や犬たちの鳴き声、そしてその攻め方、つまり「大切な寄り方」を説明する。

北嶋氏は四年間も猪を追い続け、獲ることの難しさをよく分かっているだけに、「本当にすごいものだね。身動きできないこの竹藪では恐ろしくて、とてもあそこから進めなかったよ」と感心しているが、そんなことまで分かるようになったのは、やっぱり四年間もの失敗と苦労があったればこそである。

「よかった。よかった」とがっちり握手し、心から喜び合った。

それにしても、犬たちは私が撃ったすぐ前の枯れ竹の中で寝ていた猪をそのまま一歩も動かさずに止めきった。真に「寝屋止め」だったのである。三頭のうち一頭でも寝屋に飛び込み咬みつけば、当然のこと、どんな猪でも飛び出し逃げるものであるが、全犬見事に逃げ道を断って絶妙の間をとった、離れての吠え込みである。

大猪や荒猪の対処はこれが一番うまい攻め方である。荒猪が突いて飛び出すか、寝屋で居座るかの真に紙一重の絶妙な射竦めから始まる、実力犬のなせる最高の「寝屋止め芸」なのである。

誰が何といおうと、荒猪獲りなど話して分かるような生やさしい世界ではない。それこそ何回となく失敗を重ねた経験と、本物の実力が物をいうのである。

人だって犬だって、実績の積み重ねが名勝負を作るのであり、その先に名人だって、名犬だって完成するのだと思うのである。

幸いなことに、犬たちはさしたるケガもないようで、何度も何度も「よし、よし、よくやった。ありがとう」と犬たちに大声で話しかける。

（つづく）